

国宝 さくらがおか
桜ヶ丘4号銅鐸

※展示資料はレプリカと復元品



A面



B面

桜ヶ丘遺跡(兵庫県神戸市)(弥生時代中期/神戸市立博物館蔵)



シカの行列(A面)



シカの行列(B面)



シカと弓を持つ人(A面右下)



参考 シカと弓を持つ人
(桜ヶ丘5号銅鐸)

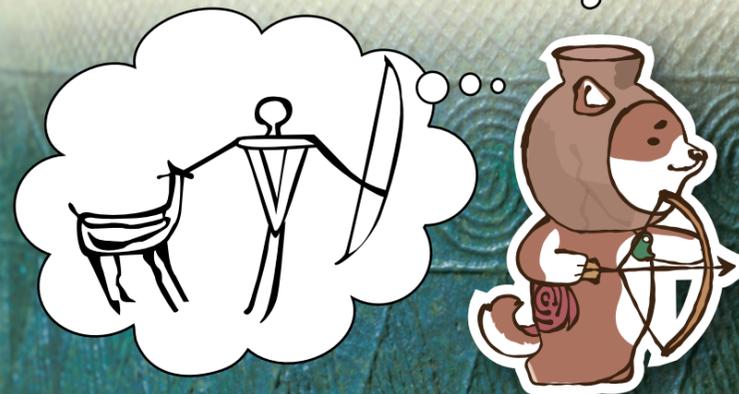
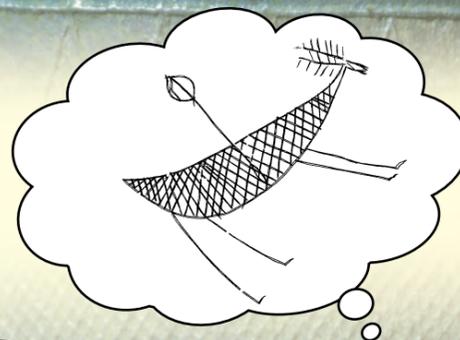
絵画銅鐸として有名な銅鐸。同時に出土した桜ヶ丘5号銅鐸(国宝、神戸市立博物館蔵)、および伝香川出土銅鐸(国宝、東京国立博物館蔵)と共に、同一工房製の連作のうちの1点と考えられている。

この4号銅鐸には裾に14頭、区画内に弓を持つ人物と共に1頭、計15頭のシカが描かれている。これらのシカは角がないためメスであり、裾には子シカも1頭交じる。また、5号銅鐸には角を人につかまれたオスシカが描かれており、シカの体格や特徴が描き分けられている。

3点の銅鐸には他にも鳥や魚や虫、農作業をする人などが描かれている。一連の絵は、かつての狩猟採集の生活から農耕による生活に変わり、豊かになったことを農耕の神に感謝する神話を描いたもの、とする解釈がある。

企画展 弥生人といきもの2022

シカをねらえ!



あいち朝日遺跡ミュージアム

■ 愛知県清須市朝日貝塚1番地 ■ TEL: 052-409-1467 ■ 駐車場 15 台

企画展

弥生人といきもの2022-シカをねらえ-

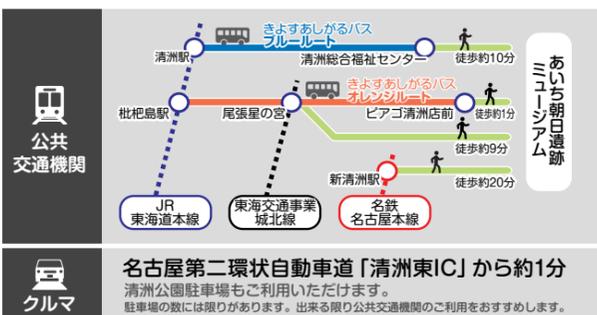
編集・発行

あいち朝日遺跡ミュージアム

2022(令和4)年7月23日



AICHI ASAHI
SITE MUSEUM
あいち朝日遺跡ミュージアム



AICHI ASAHI SITE MUSEUM
あいち朝日遺跡ミュージアム

はじめに

あいち朝日遺跡ミュージアムでは、大人のみならず、子供たちにも朝日遺跡や弥生時代について興味を持ち理解を深めてもらうため、弥生時代の人々と様々な「いきもの」との関わりについて紹介する企画展を毎年開催しています。

2回目となる今回は、弥生時代の人々にとって最も重要な動物である「シカ」を取り上げます。シカは弥生時代の人々にとって食料や道具の材料であるだけでなく、豊穡をもたらす神聖な動物として農耕祭祀とも深い関わりがありました。

本展覧会では、朝日遺跡から出土したシカの骨や角で作られた多数の製品を始め、日本各地の遺跡でみつけたシカを描いた資料を展示し、弥生人とシカとの関わりについて紹介します。

目次

- はじめに 2
- シカをねらえ! 3
- シカでつくろう! 5
- シカに祈ろう! 6
- 国宝 桜ヶ丘4号銅鐸 8



天然記念物「奈良のシカ」

凡例

- ・本書は2022年7月23日から9月19日まで、あいち朝日遺跡ミュージアムで開催する企画展「弥生人といきもの2022 シカをねらえ!」の展示パンフレットである。
- ・本書の構成と実際の展示構成は異なる部分がある。
- ・掲載資料の時期区分は、朝日遺跡出土品については弥生時代前期(B.C.6~B.C.4c)、中期(B.C.4~B.C.1c)、後期(A.D.1~2c)とするが、他地域の出土品については所蔵者の見解に従う。
- ・掲載資料のうち重要文化財には「◎」、市指定文化財には「□」を付している。
- ・掲載写真・図等のうち、提供者と所蔵者が同じ場合は、所蔵者のみの記載とする。どちらも記載のないものは、本ミュージアム所蔵である。
- ・本書の執筆・編集は、田中恵美が行った。

謝辞

本展覧会の開催にあたり、下記の機関並びに各機関の担当者の皆様にご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。(五十音順、敬称略)

愛知県埋蔵文化財センター、愛知県埋蔵文化財調査センター、伊都国歴史博物館、大阪府立弥生博物館、九州国立博物館、神戸市立博物館、斎宮歴史博物館、新城市教育委員会、鈴鹿市考古博物館、田原本町教育委員会、名古屋市博物館、奈良の鹿愛護会、奈良文化財研究所、文化財活用センター、文化庁、三重県総合博物館、福岡県立アジア交流センター、福岡市博物館、福岡市埋蔵文化財センター

主な参考文献

- 神戸市立博物館 2000『国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈 -神戸市立博物館-』
- 田原本町教育委員会 2006『弥生の絵画 ~唐古・鍵遺跡と清水風遺跡の土器絵画~』田原本の遺跡4
- 大阪府立弥生博物館 2006『弥生画帖 -弥生人が描いた世界-』
- 西谷正 編 2012『伊都国の研究』学生社
- 鈴鹿市考古博物館2015『鹿 -『鹿と古代人』その後-』
- 福岡市博物館 2015『新・奴国展 -ふくおか創世記-』

表紙背景：桜ヶ丘4号銅鐸（部分）神戸市立博物館蔵

シカをねらえ!

日本列島に弓矢が登場するのは、氷河期が終わる縄文時代草創期からです。それ以前の旧石器時代には^{なげやり}投槍でナウマンゾウなどの大型獣を狩猟していました。氷河期が終わると気候の温暖化により寒冷地に適応した大型獣は姿を消し、日本列島ではシカやイノシシなどの広葉樹の森にすむ、より小型で素早い動物が主流となります。そのような動物を猟で仕留めるには、投槍よりも高速で矢を放つ弓の方が適していました。シカはイノシシと並び、縄文時代から弥生時代にかけて最も多く狩猟されてきた動物でした。



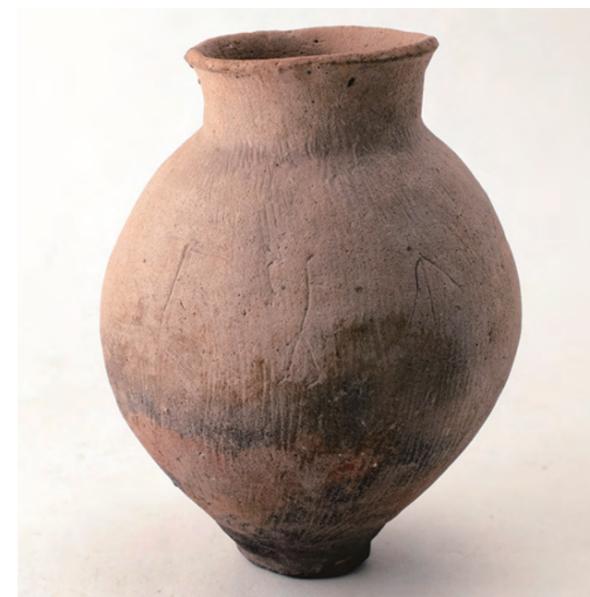
ニホンジカ オス（三重県総合博物館蔵）

ニホンジカ 学名 *Cervus nippon*
 哺乳綱 偶蹄目 シカ科 シカ属
 体長 オス90-190cm、メス90-150cm
 肩高 オス70-130cm、メス60-110cm
 体重 オス 50-200kg、メス25-80kg

日本にはエゾシカ、ホンシュウジカ、ヤクシカなど体格差の大きい7つの地域亜種が生息する。左の写真は冬のオスのホンシュウジカ。

夏は体に白い斑点があり、角も袋角という皮におおわれ丸みを帯びた、成長途中の状態である(2頁写真参照)。メスは体の模様はオスとほぼ同じだが、体格は小さく角が生えない。普段は雌雄別々の群れで行動し、繁殖期になると優位のオスが複数のメスを囲い込む縄張りをつくる。

オスの角は、春になると生え始め、夏にかけて成長し、繁殖期の秋に完成する。しかし翌年の春先には根元から自然に落ちてしまい、再び新しい角が生え始める、という1年で成長と脱落をくり返すサイクルを持っている。



しゅりょうもんこ かみみだ
 □狩猟文壺 上賀田遺跡（三重県鈴鹿市）
 （弥生時代後期／鈴鹿市考古博物館蔵） ※展示はレプリカ（斎宮歴史博物館蔵）

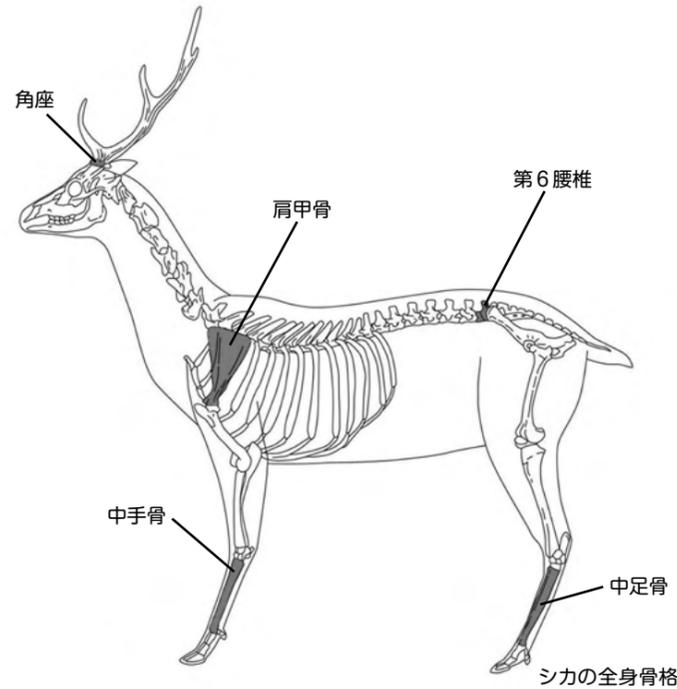


絵画拡大図

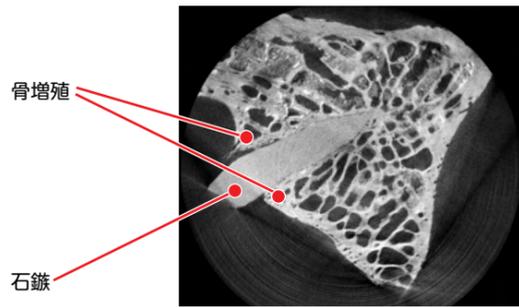
弥生土器の壺に「シカの上半身・弓を持つ人・矢印のような記号」が並んで描かれ、弓矢によるシカ狩りの様子を表している。シカと弓矢を持つ人物を組み合わせ描いた例としては、他に大阪府彼方遺跡や岡山県津島江道遺跡から出土した弥生土器や、伝香川出土銅鐸（東京国立博物館蔵）、谷文晁旧蔵銅鐸（絵図と拓本のみ伝わる）などが知られる。人物の右隣に描かれている記号の解釈については、この人物が狩人であることを示すとする説、足先の形に由来する鳥を表現する記号だとする説、などがある。



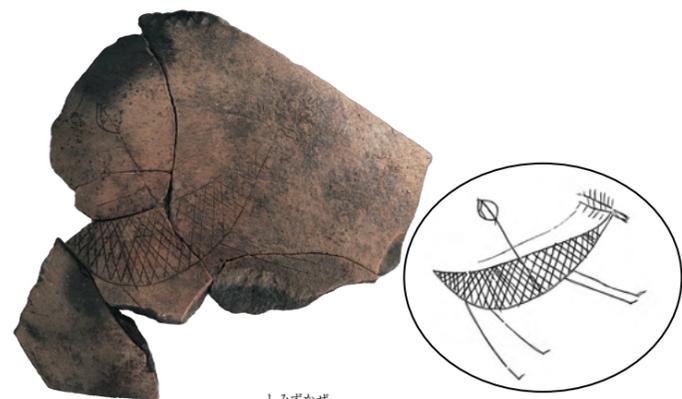
◎石鏃が刺さったシカの骨（弥生時代中期／朝日遺跡）
写真提供：奈良文化財研究所



チャート製の石鏃が刺さったニホンジカの第6腰椎。X線CTスキャンで調査したところ、立っているシカに右斜め前方からほぼ水平に矢が発射されたこと、石鏃が脊髄までは到達せず周囲の骨に増殖した治癒の痕跡があることから、このシカは矢を受けた後もしばらく生きていたこと、などがわかった。おそらく狩りは失敗し、シカは逃げてしまったのだろう。ただし、この骨は朝日遺跡の集落の中から出土しているため、このシカはその後別の機会に狩猟され、集落に運び込まれてしまったと推測される。



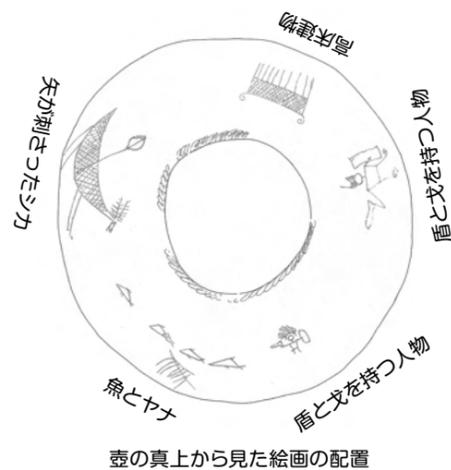
X線CTスキャン画像
写真提供：奈良文化財研究所（一部追記）



絵画土器（矢が刺さったシカ） 清水風遺跡（奈良県田原本町）
（弥生時代中期／田原本町教育委員会蔵）

大型の壺に描かれた、胴体に矢が刺さったシカ。角の枝が現実のシカよりも多く、理想化した立派な姿として描かれているのかもしれない。矢は矢羽根や石鏃の形まできちんと描かれている。

この絵は右上の図のように、壺の肩を囲むように連続して描かれた絵の一部で、他に魚とヤナらしき線、2人の盾と戈を持つ人物、高床建物が描かれている。2人の人物はおそらくシャーマンであり、狩猟の様子を描いたというよりは、祭祀の様子が祭祀に関係する物語を描いたものようだ。この壺には祭祀に供える酒を入れたのではないかと説がある。



壺の真上から見た絵画の配置

シカでつくろう！

弥生人はシカを猟で捕らえると、肉は食料に、皮は衣服や革紐などに加工していたと考えられますが、弥生時代の遺跡から肉や皮はみつかりません。骨や角は出土することがあり、これらは漁労具などの実用品や、アクセサリなどをつくる材料にされていました。朝日遺跡では様々な動物の骨角器が出土していますが、最も多いのがシカを素材としたものです。

シカの角には水に長時間浸けておくと少し柔らかくなる性質があるため、細かな細工や加工をしやすい素材でした。また、シカの角は毎年生え替わります。そのため角は狩猟ができない人でも、春先に落ちたものを採集することで入手できました。

弥生人にとってのシカは、全身が食料や道具の素材に利用できる、まさに捨てる場所がない動物でした。



◎シカの角製の鈎 朝日遺跡



◎シカの骨製のヤス 朝日遺跡



◎シカの角製の鈎針 朝日遺跡

刺突漁に使う道具のうち、獲物から抜けないようにするカエシがあるものを鈎、ないものをヤスという。鈎はシカの角、ヤスは中手骨・中足骨（人間ならば掌や足の甲を構成する骨）で作ったものが多い。鈎針は角の枝分かれた部分を利用して作られている。



◎紡錘車 朝日遺跡
写真提供：愛知県埋蔵文化財センター

繊維をより合わせて糸を紡ぐための道具を紡錘といい、その糸を巻き取る軸の回転力を強めるおもりが紡錘車である。土製が多いが、写真右端のものはシカの角で最も太い角座という根元の部位で作られた珍しいもの。



◎骨鏃・角鏃 朝日遺跡

シカの角や骨から作られた鏃。鈎やヤスに比べると定型化しておらず、様々な形のものが見つっている。右端のように石鏃を忠実に模したのものについては、祭祀用の可能性もある。



◎髪飾り 朝日遺跡



◎垂飾 朝日遺跡

髪飾りや垂飾にもシカの角や骨が多く用いられた。細かな装飾が施されたものもある。

シカに祈ろう!

弥生人にとって、シカは単なる狩猟の獲物ではありませんでした。弥生時代には動物の肩甲骨を使う太占という占いが行われましたが、最も多く使われたのはシカでした。また、弥生時代の土器や銅鐸には絵が描かれたものがありますが、シカの絵が最多となっています。これら祭祀用の道具にシカが使われたのは、シカが弥生時代の祭祀において重要な霊獣だったためです。

シカを神聖視する信仰も、大陸から渡来人が農耕と共に日本にもたらしたようです。シカの角の生え替わりを稲作の周期に合わせたとする説、『播磨国風土記』にシカの血に浸した種籾が一夜で発芽する説話があることから同様の信仰があったとする説、などがあります。シカは豊かな実りをもたらす「穀霊」だと考えられていました。



6頭の縦に並ぶシカをベンガラという赤い顔料で描いている。弥生時代の絵はほとんどが線刻画で、シカを赤彩で描いた例はこれが日本唯一のもの。

シカが描かれた筒形土製品 一色青海遺跡(愛知県稲沢市)
(弥生時代中期/愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)



シカの肩甲骨に、熱した棒を押し当てた黒い跡がついている。骨を使う占いも中国や朝鮮半島から伝わった。

ト骨 朝日遺跡



弥生時代には珍しい立体像。首のひねり具合や緊張感のある表情から、立ち上がり周囲を警戒するオスジカを表していたと思われる。頭に角を差すための穴があり、首回りに長い毛を描く等、冬のオスジカの特徴を的確に捉え、表面全体にベンガラを塗る。ベンガラで赤彩したパレス・スタイル土器が初めて報告された高蔵遺跡のすぐ南でみつかった「赤いシカ」であり、何らかの祭祀に関係していたのだろう。

シカ形土製品 玉ノ井遺跡(愛知県名古屋市)
(弥生時代/名古屋博物館蔵)



シカ形木器 上籬子遺跡(福岡県糸島市)
(弥生時代中期/伊都国歴史博物館蔵)

上籬子遺跡では流路から多数の木製品が出土しており、水辺での祭祀に使われたと考えられている。この像もその一つでシカの像とされるが、まるでほほえむ人のような顔の表現が特徴である。水は稲作にとって欠かせないものであると同時に、災害をもたらすものでもある。豊穣と災難よけという、水への多面的な祈りが込められた造形なのかもしれない。



絵画付中細形銅戈 大板井遺跡(福岡県小郡市)
(弥生時代中期/九州国立博物館蔵)
撮影者: 落合晴彦

銅戈は主に北部九州で使われた祭祀具。柄に装着する際の差し込み部分にあたる、茎にシカの絵を鑄出している例が4点ほど知られており、この銅戈もその1点。絵そのものが大変小さい上に、柄に装着すると見えなくなる部分なので、人々に見せるための絵ではなく、農耕祭祀の神への祈りを込めて描かれたものだろう。



◎絵画土器(シカ) 唐古・鍵遺跡(奈良県田原本町)
(弥生時代中期/田原本町教育委員会蔵)
唐古・鍵遺跡最古の絵画土器。摂津地域からの搬入品。



◎絵画土器(シカ) 唐古・鍵遺跡(奈良県田原本町)
(弥生時代中期/田原本町教育委員会蔵)



◎絵画土器(シカと建物) 唐古・鍵遺跡(奈良県田原本町)
(弥生時代中期/田原本町教育委員会蔵)



◎絵画土器(シカ) 唐古・鍵遺跡(奈良県田原本町)
(弥生時代中期/田原本町教育委員会蔵)

弥生時代の絵画土器は全国で800点ほどみつまっているが、うち350点以上が唐古・鍵遺跡で出土している。大半が壺の破片とみられており、画題はシカ、それも角のあるオスジカが多い。これらは祭祀に供えるための土器で、春に生え始めたオスジカの角が完成するのは秋であることから、秋の祭祀に使われたと考えられている。絵を描くことで土器に絵の意味や祈りを込めたのである。建物の隣にシカを描いた壺には、種籾を保管する高床倉庫に「穀霊」であるシカがやってくる様子を描くことで、豊穣への願いを込めたのだろう。



□シカが描かれた銅鐸鑄型 赤穂ノ浦遺跡(福岡県福岡市)
(弥生時代中期/福岡市埋蔵文化財センター蔵)



復元した銅鐸

横帯文銅鐸の鑄型。シカが釣針で釣られたような絵が描かれている。釣針のような鈎状文には魔よけや豊穣の意味があるとされ、シカと鈎状文を組合せた絵は北部九州から瀬戸内地方にみられる。獲物をしっかり捕らえて放さない、という豊穣を願う表現だと考えられる。